

旋律やビートを味わい楽しむ器楽表現活動

－第5学年における鼓笛隊の実践－

Instrumental activities to enjoy melody and beat: The practice of marching band by student of the 5th grade

飯泉正人(牛久市立向台小学校)

Masato Iizumi (Mukoudai Elementary School)

(キーワード)

リコーダー、運指、アフター・ビート、シャッフル・ビート、音楽を形づくっている要素

1. 実践の背景

牛久市は、牛久沼のかっぱ伝説にちなんだ「かっぱ祭り」を毎年7月最終週末に開催しており、そこでパレードが行われている。牛久市立向台小学校は5年生が鼓笛隊を組み、学校代表として演奏パレードに出演している。学校としては、5学年児童に、学校代表としての責任感をもってこれに取り組むことにより、代表として自己有用観や、発表をやりとげた達成感を味わわせたいと考え、本年度も5学年鼓笛隊のかっぱ祭りへの参加を決めた。

2. 実践の指針

学校代表としての責任感を持って取り組ませるのだが、責任感のみ強調して指導すると、児童の中には義務感や受身な姿勢が生まれてしまう。そこで、学校「代表としてパレードで何をしてくるのか」を考えた。そして、「楽しさと元気をあたえる演奏」を、そのために「自分たち自身が音楽を楽しんで元気になれるような演奏」をすることを児童にとっての活動目標とした。演奏を楽しむためには、その曲のもつよさを味わう必要がある。これは学習指導要領の述べるところの「音楽を形づくっている要素」である。本実践で演奏する曲目においては「旋律」(のよさを味わうためのリコーダーの技能)と「リズム」であった。

3. 実践の目標

旋律やビートのよさや面白さを味わい、それらを表現する技能を身に付け、音楽を楽しみながら器楽表現活動を行う。

4. 目標に向けての手立て

本実践は(1)の選曲から始まっており、実践の目標は選曲後に具体的なものとした。以下の(1)は目標ができる前の手立て、(2)～(5)が目標に向けての手立てである。

(1) 選曲

曲をNHK 2020年応援ソング「パプリカ」とした。曲のテーマが児童の活動目標と合致した。演奏するにあたって、技能的にも表現的にも重要視した「音楽を形づくっている要素」、それが「旋律」(のよさを味わうためのリコーダーの技能)と「ビート」であった。

(2) 楽器編成と編曲

児童が思い描いている編成でもある例年の楽器編成を取り入れた。「旋律」と「ビート」はこの曲のよさを味わうために欠かせない要素であり技能的にも課題を抱えるものであった。そのため、これらを押さえて編曲や指導を行う必要があった。それにより、これらの要素を曲の持ち味として生かして表現することができると考えた。

(3) アフター・ビートの指導

「音楽を形づくっている要素」の中で、「パプリカ」にとって曲の「楽しさ」や曲の「ノリ」を生み出すものと考えた。「大きいアフター・ビート」と「小さいアフター・ビート」の2種類があり、それぞれの方法で感じ取り表現させた。また、さらに楽しさを味わうため、リコーダーと鍵盤ハーモニカの児童には長休符でダンスを取り入れた。

(4) シャッフル・ビートの指導

「パプリカ」にとってアフター・ビートと並び、曲の「ノリ」を生み出すもので、曲の魅力の素となっているものと考えた。シャッフル・ビートの技能的な指導は、打楽器の児童にのみ必要であると考えた。リコーダーや鍵盤ハーモニカ等のパートは、打楽器の演奏するビートやリズムに乗って演奏することで、全体として曲の持ち味としてのビートが表現できると考えた。打楽器の児童は、教師のタンバリン伴奏に合わせる方法で練習を行った。

(5) リコーダー運指の指導

ソプラノリコーダーについては、5学年の時点で「ファ#」、「ソ#」の運指は学習しているが、この2音の運指は特に複雑である。(本校児童の使用するのはジャーマン式、音楽の教科書は教育芸術社の「小学生の音楽」である。)



楽譜 1

調性はソプラノリコーダーにとって最も容易なハ長調に移調したが、臨時記号により「ファ#」と「ソ#」が生じてしまう。しかも、楽譜1に示す部分では、2音を行き来する動きとなる。よって、この運指指導は、「パプリカ」の旋律を味わい楽しんで演奏するための運指指導である。「ソ#」は「ラ」から下りて戻る練習法、「ファ#」は「ソ」から下りて戻る方法でそれぞれ反復練習を行い、その後旋律を練習した。

5. 手立てについての結果と考察

「パプリカ」は意欲づけの基盤となった。メディアを通して児童が持っていたこの曲への好印象が影響していたと考える。

児童は例年の編成を想定し、打楽器を希望する児童が多かった。例年のような打楽器数種類を入れた編成にしたことは妥当であったと考える。リズムや調性を技能的に平易になるよう編曲したことも、練習の効率化や、児童が練習を楽しむといった意味で有用であったと考える。

アフター・ビートについて児童は、これが曲の「楽しさ」や曲の「ノリ」を生み出すものであることを感じ取り、ビートそのものを楽しんで演奏することができた。しかし、音楽表現に結びついたかどうかについては課題が残った。特に「小さいアフター・ビート」を音楽として表現することは難しかったようだ。児童らに、細かいビートを感じ取りながら歌ったり演奏したりする経験がないことが推測できた。

シャッフル・ビートについては、技能的な演奏指導は打楽器の児童のみに行ったことは効率的であった。旋律を担当するリコーダーなどのパートは、打楽器の演奏するシャッフル・ビートにのって演奏することで、シャッフルを難解に捉えることなく、曲の「ノリ」と捉えて楽しみながら旋律を演奏することができた。

リコーダー運指の指導は、最も時間をかけて指導した内容となった。運指練習をパターン化した反復練習は有効ではあったが、運指が困難であったにもかかわらず、9週間という長い期間飽きずに練習を続けられたのは、教師側が練習を押し付けず、自主的に練習できる時間を確保したことと、「指づかいは難しいけれども、なんとかしてこの旋律を演奏したい」という児童の「演奏への意欲」があったことからである。意欲は、リコーダー演奏に対して苦手意識が強かった児童からも感じられた。